

# 本宮祭祀の意義について

橋 本 郷 見

「鎮護国家」ということは宗教家だけでなく、国を思ふものは、たれしも念願していることであると思います。然し、時代の變遷に伴つて、この願いはもつと拡げていかねばならなくなりました。

国家を鎮護することが重大事であることは、いつの時代に於ても変わりはないのでありますが、ただそれだけで終わるものではなく、一国はその国の安泰と繁栄の力をもつて、隣邦諸国のために尽くしていき、国々は互いに相睦<sup>むつ</sup>み相たすけて、地上の全国家が一つに和していくことにならねばならぬのであつて、今日の世界の大勢は、一国だけの鎮護とか安泰ということば、望んでもできないことでありまして、このことは、何人も異論のないところであると思います。

すなわち、国家を鎮護することは、全世界の国々が、一つに和していくための基盤をつくるためである、ということにならなければなりません

ん。でありますから、各国はそれぞれの地域に於て健全な発展をどげ、その民俗的、あるいは地理的な自然の条件等の特質を発揮して、その力を友邦諸国のために捧げ、世界の大和<sup>たいわ</sup>を築きあげようとしていくところに、はじめて、それぞれの国家の隆盛も、繁栄も、安泰も、できていくことになるのであります。

一国がその国力を充実させ強大にして、その力で他国を征服しようとするような侵略主義の時代はもはや過ぎ去りました。そのようなことをして一部の国家間に争いを起こしたら、それは部分的な争いで終わるものではなく、広い範囲の国家群の争いに波及していつて、いつ地上の人間が滅亡<sup>はめ</sup>するような破目に陥らぬとも限らぬのであつて、このことは、今更詳<sup>くわ</sup>しい説明の必要はないことと思います。

さて、人間は如何なる人も幸福を求めてやまないのですが、その幸福を求めている人間の世界には、いろいろな争いがあります。だが、争いからは幸福は生まれて来ません。それなのに、多くの人々が争っているのは、幸福にならなくてもよいというのではなくて、やはり<sup>しあわせ</sup>幸せになりたいことには変わりないと思います。それにもかかわらず、人の世に争いが絶えないのはなぜでしょうか。これは、争つて勝てば幸福になれると思つているからでありましょう。ここに人間の大きな錯覚があるのであります。

争つて相手を倒せば、自分は満足ができて幸福になれると思つているその幸福とは、自分だけの幸福を考えていることであります。すなわち、他の人は不幸でも、自分だけで幸福になれるかのような、思いちがいをしているからであります。

人間の幸福というものは、自分単独で得られるものではありません。充ち足りた環境とのつながりの中においてこそ、はじめて幸福になれるのであります。自分の生活に直接間接にかかわりのある人々が、もしも、みんな貧困に苦しんだり、病苦に悩んだりしているとしたら、その中において、自分だけが幸せになれるでしょうか。平易なたとえであります。商人は自分のお顧客<sup>とくき</sup>さんが、みんな裕福に富んで幸せであつてこそ、自分の商売の繁盛もあり得るのであります。貧乏で困つている人ばかりが相手であつたなら、商人は商売の繁盛や幸せなど望むことはできません。

個人だけが幸せになろうとしても、環境が伴わなければ、それは不可能なことであります。でありますから、人間は自己の幸福を<sup>こゝろ</sup>希うなら、まず自分にかゝりのある周囲の人々を幸せにすることに努力すべきで

あつて、それが自分を幸福にする元であります。そこからしか幸福は生まれて来ないのであります。

この道理は個人の問題だけでなく、国と国との関係に於ても同様であります。一国が富み栄えようとすれば、その友邦諸国が豊かで、安らかに治ま<sup>ち</sup>つていなければなりません。輸出の振興を計るにしても、相手諸国に購買力があつて、お互いに平和な友好関係をつづけていつていてこそであります。

以上のように、人間が幸福であるためには「人間の世界が平和と繁榮のうちに進化をつづけていくこと」が、絶対に必要な基盤なのであり、条件なのであります。

人間生活の一切は、この基盤をつくりあげていくためにこそあるのであるといつても過言ではないと思ひます。



自然社が人の世の理法を解明し、人生如何に生くべきかを説いて、人々を幸福に導きつつあるのも、それは単に、個人だけを幸福にしようとしているのではなく、広く世の中のため、人々のため、より一層お役に立つ人々を育てあげようとしているのであります。更にいえば、人間の持てる力、はたらき（能力）を伸ばして、広く世の人々のために働かせていくことができるようにしているのであります。そして、それらの人々が養い得た力を、世の中をよりよくするため、国家の繁榮と安泰のために寄与し捧げていくことを実現しようとしているのであります。

かくて、わが日本国をりつばな国として、その国力を友邦諸国の繁榮のためにお役に立つようにして、全世界平和のために尽くしていかなければなりません。これこそ、自然社の布教の眼目であり、そこにこそ、

国民一人一人の幸福もあるのであります。

すなわち、全世界が一つに和したところにこそ、各人の幸福はあり得るのでありまして、国内に騒乱が起きたり、他国との戦争があつたりしたのでは、個人の幸福などはたちどころに、吹っ飛んでしまうことになります。

そこでわれわれは、各人がまず自分の身を健全にし、自分の生活を打ち立てて、安定させていかなければなりません。それはもちろん、自分自身のためだけでなく、自分のはたらきを、国の繁栄と安泰のためにお役に立てるためであります。そしてその国力をあげて友邦のために尽くし、世界の平和に寄与するためであります。

世上には往々にして、国家のため社会のために働くという名目のもとに、家庭をかえりみないということがあつたり、世界の平和をととなえな

がら、自分の国家を軽んじたり、無視したりする人がありますが、これは、人間のはたらきというものはその立場によつてできるものであつて、立場を無視しては、そのはたらきを全うすることはできないのみならず、世の中の秩序を乱し、和をこわすことになる、ということを知らないからであります。すなわち、人間の本質を生かしてはたらかすものはその立場である、という人間の世の理ことわりに対する無知のしからしむるところであります。

平和のためというので、自国を尊重することをせずに、かえつて他国を尊重するような国民があるとしたならば、それは人間として生きている自分の立場を無視しているばかりではなく、世を乱して、遂には自分の立場を失い、そのはたらきを全うすることはできなくなるのであります。従つて、このようなことは国内の和を乱すことであり、ひいては世

界平和のためにも逆の結果とすらなることがあるのであります。

でありますから、人間は、それぞれの国の国民としての立場に於て、自分の国を愛し、その国の特質を発揮することによつて、他国と相互に依存し睦み合つて、世界を平和の楽土とするように努力していかなければなりません。

○

このような意味において、自然社が世の人々に教を説いているのは、個々人が人間としての自覚を高めていつて、あらゆる幸福に恵まれ、国家の繁栄と安泰のために尽くすことができるように導いて、国力の充実ははかり、かくて、その国力を世界平和のために尽くすことができるようにとの念願に基くものであります。

従つて、今度大神様の神慮によつて、その大神霊の鎮座ましますみ社

が建立されたことは、自然社としてはその布教の礎が定まつたことでありまして、われわれはもちろんのこと、世のいかなる人もこのみ社にぬかずいて、ひたすら世界の平和と、み国の弥栄えを祈願し、あわせて世の人々を導き救い給いて、幸いあらしめ給えとの熱願を祈り奉るべきであります。

でありますから、このみ社に参拝する場合は、何人も必ず右の祈りを捧げて、しかる後でなければ、自分の「私こと」の願いはすべきではないということ、はつきりと知つていただきたいのであります。

われわれはこのみ社の祭祀の意義を深く心に体して、これを子々孫々に至るまでたがえることのないよう伝えていかなければなりません。そして信仰の根本精神を、つねにこのみ社祭祀の意義に仰いで誤ることのないよう、始終精進に真心をつくしていかなばならないのであります。

## (付記)

わが国における神社の起源は、神意を奉じて行われたものでありまして、神慮によつてご鎮座の地が定められたものであります。すなわち、人間本位ではなく、ご齋神本位でありました。従つて参拝者のために便利であるかないか、などということに、何ら考慮されることなく、穢れのない清浄の地がえられたのであります。

後の世になつて、このご鎮座ということが勧請ということになつて、人間の参集に便利な土地を、人間の方で適当に選定して、そこにお社を建立して神霊を勧請するようなことが行われるようになりました。

自然社でも最初は布教に便利な地へ勧請しようとしていたため、敷地が決定しなかつたのでありましたが、その誤りを教えていただいたので、今度の本宮は、神慮による御鎮座の御社であることを、深く真心に銘記

していただきたいのであります。

次に、神社に祭祀されてあるご齋神には、通常ご神号(ご神名)がありますが、これは多くが、かつて現象界に生存しておられたことのある人の「みたま」であるからであり、また、神のおはたらきを言い現わしていただける場合もあるからであります。

然しながら、元霊神にはご神名などあろう道理はないのであつて、自然社本宮のご齋神はただ大神様と申上げるよりほかはないのであります。が、現象界は形の世界でありまして、形なき神様を、神社という建物によつて祭祀し礼拝しておりますので、何らかお称えする具体的ご神名があつた方が、形の世界にいる者にとつてはわかり易く、また氣持の上にとびつたりと観念することができますので、われわれ人間からのたたえ

言葉として、「<sup>すめらみ</sup>皇大神」と申上げることにしたのであります。従つてこれは「神名ではなく、われわれがたたえて申上げる「たたえことば」であるということ、よく知つておいていただきたいのであります。

また、「自然社本宮」という「社号」も、他の神社と区別するためには、何らかの名称がなくてはならないから、かく申上げることにしたのであつて、本来は「大神様御鎮座のみ社<sup>やしろ</sup>」とだけでよいのであるということも、わかつていて、お称<sup>な</sup>えし、お呼び申上げるようにしていただきたいのであります。

すなわち、名まえにとらわれて、他の神社やそのご齋神と並列的な気持ちで考えないように、正しい意味でわかつていただくよう、ここにくれぐれも申上げておく次第であります。

## 略 歴

○橋本郷見【明治三十二年（一八九九）〜  
昭和五十九年（一九八四）】

自然社初代教長。昭和二十二年九月、自然社を創設。昭和三十八年十二月、自然社本宮鎮座落成。

この文章は、自然社本宮落成に合わせて、「自然」第百八十号（昭和三十八年十二月号）に掲載されたものであり、第五十回本宮例大祭を迎えるに当たり、原文のままここに再発行する。

### 本宮祭祀の意義について

平成二十四年一月一日 初版発行

発行 自然社

大阪市阿倍野区松虫通二一二三十一  
TEL ○六十六六五二四四二三